







Handwritten Japanese text in cursive style (sōsho), written vertically from right to left. The text is highly stylized and difficult to decipher precisely, but appears to be a continuous passage of prose or poetry. The characters are fluidly connected, with varying line thicknesses and dynamic movement. The overall impression is one of artistic calligraphy rather than formal documentation.

Handwritten characters on the right edge of the page, partially cut off.

Handwritten characters in the middle right section.

Handwritten characters in the upper right section.

Handwritten characters in the middle right section.

Handwritten characters in the middle right section.

Handwritten characters in the middle right section.

Handwritten characters in the middle right section.

Handwritten characters in the middle right section.



池邊三山先生書簡軸

縁起記

新聞記者たることは自分が早稲田正  
 字多何からの者望んであらたといふても  
 新字記者が自分の適材と考つた訳では  
 ないたゞ奥書者が帝都に及ぶ買ひて  
 来て見ると一万事が御里で夢を志した  
 ことは違ひ先輩も此の地位に知り人もない  
 ものは官界や実業界で世の見出しよく  
 また秩序の整つた世の中で自らの力徳  
 勝ちに進める商賈は南方の役者新字  
 記者より外にはい、体力のなき自分は南方  
 匠に付られたい藝術的を他方者は尚更  
 役者にあつたことは、結局新字記者文が何  
 とか勉強次第であつただらうといふことを  
 新字記者を志望したつてある  
 しかし此社会を大失望の縁故が先輩が冬と  
 秋月には後で判つて戸迷しは、早稲田と  
 出て支那へ身を委ねしその旨支那や支那事情と  
 研究したところが縁とありて上海報社長の丹手  
 三郎先生の知こと侍る人の紹介で朝日  
 新聞の支那池邊三山先生に知れし後自  
 分の米政への留意に志掛りし際先生の自信  
 を托された従つて留學中その方面に多分の  
 研究を遂げた帰京北平に特派されしことに  
 ついたつてある



出て支那へ身を委ねしその旨支那まや支那事情を  
研究したころが縁となりて上海日報社長兼手  
三郎先生の知己を得その人の紹介で朝日  
新聞主筆池邊三山先生に知れりその後自  
分の米政への関心から出掛りし際先づか通信  
を北へ来た従つて留學中その方面に多量の  
研究を遂げたり帰京北京に特派されることに  
なつたのである

その頃の北京は東洋問題の中心地といふこ  
といやうにロンドンタイムズ紙育ヘランドをほい  
め独伴等から各有力の特派員を駐在せしか  
て居り日本の大新聞社からは勿論新聞記者  
手配も特派員を送つて居りたのである中に  
伍して行かむばふらふいづれ着任当初は統制  
恐怖感より起したるものもある着任して三年目に  
辛夷の革命が起り北京は大混乱に陥つた西に新  
聞特派員の活躍する秋であった力尚試みさ  
るつ所であつたこの通信戦雲報載の初期に於て  
池邊先生から送られた手紙がこの巻軸である  
自分には何れにも替り難い満足と以て再三誤  
入で奮勵事項としたものをみる自らは亦實  
として是を永く保存する